

2012 年度(平成 24 年度)「世界エイズデー」キャンペーンテーマ・フォーラム報告(第 2 回)

特定非営利活動法人エイズ&ソサエティ研究会議(JASA)の第 109 回フォーラム Part2 「ここから始まる～2012 年エイズキャンペーンのテーマ策定に向けて」(大阪編)が 5 月 18 日午後 6 時半から 8 時まで、JASA および公益財団法人エイズ予防財団の共催フォーラムとして大阪・なんばの検査相談・啓発・支援センター「chot CAST なんば」オープンスペースで開かれた。参加者は 26 人だった。

■開会あいさつ(公益財団法人エイズ予防財団理事 白阪琢磨)

公益財団として生まれ変わったエイズ予防財団がこれからどう歩いていくか。皆様のご協力、ご意見、叱咤激励が何より必要。本日は会場提供のご協力、予想以上の参加を嬉しく思う。ご意見は集約してエイズ予防情報ネット(API-Net)にも掲載する予定。遠慮なくご発言いただきたい。

■趣旨説明(公益財団法人エイズ予防財団理事・JASA 事務局長 宮田一雄)

平成 24 年度「世界エイズデー」キャンペーンのテーマ策定について経緯と趣旨を説明(資料 1)。

■エイズ予防情報ネットに寄せられた意見の紹介とフォーラム Part1(東京)の報告

(公益財団法人エイズ予防財団事務局 柏崎正雄)

エイズ予防情報ネットを通じ 4 月 16 日(月)から 5 月 20 日(日)までキャンペーンテーマに関する意見を募集。17 日までに届いた意見を要約して紹介(資料 2)。

東京で開いた第 1 回フォーラムの意見を要約して紹介(資料 3)

ディスカッション

■司会・進行(特定非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス代表 長谷川博史)

HIV/エイズの活動を通して感じていること、解決しなければならない課題などを話してほしい。キャンペーンとは、1 つの目標や課題を設定し、期間を設け、多様な人たちのエネルギーを集約して問題解決をはかることではないか。世界エイズデーに 1 つのイベントを行うだけではキャンペーンとはいえない。同一のテーマに向けて力をあわせ、ある期間に集中して取り組むことで成果を出していきたい。行政、民間、NGO、医療機関、そして感染している人もしていない人も一緒に考えていけたらと思う。

■参加者からは以下のような意見が出された。

【取り組むべき課題】

《課題》

- ・電話相談で最近、即日検査の判定保留に関する相談が増えてきた。判定保留時の相談の時間があまりとられていない。電話相談の増加は、電話相談自体の存在が伝わっているともいえるが、判定保留から確認検査までの間の宙ぶらりんのところが気になる。

- ・エイズは死なない病気になったといわれる一方、エイズに含まれる疾病とは別のところで、加齢により生活者としての変容が起きている。例えば現役からの引退、癌や脳卒中といったことがある。医療や高齢者介護、福祉の分野で対応の準備が不足している。拠点病院構想は、今後 10 年のうちに転換すべきではないか。

→HIV/エイズの流行が長期化する中で、エイズ対策も転換期を迎えている。

→検査場では判定保留となった人に対する相談に時間をかけられるが、一般診療の場では、あまり相談に時間を割くことができない。「詳しい話は次回ね」と言われてしまう。本人はリアリティでいっぱいなのだが。

- ・通常検査と即日検査を実施しているが、過去には定員オーバーのため受検希望者の約半分をやむを得ず断ったことがある。そうした事態がなくなるよう方策を検討する必要がある。
→検査促進だけを進めても問題解決にはならないという一例である。
→検査促進にせよ、陽性者支援にせよ、メッセージはウイルスをコントロールし、長期療養を続けることが可能であると呼びかけている。一方で、ウイルスがしっかり抑えられ管理できていても、ウイルス以外のところで重症に陥ることもある。そうした報告がある中で、発信側としては葛藤がある。
→「ウイルスはコントロールできる」というメッセージは、感染の分かった人には有効なメッセージになりうる。しかし伝える側の意図したように伝わらないこともある。
→安心のメッセージが逆に楽観論や悪い影響を与えることもある。そのときどうするか。
- ・性教育やエイズ教育に対し、学校の先生方が二の足を踏んでも仕方がない状況がある。とんでもなく触れられていない。保護者が高校の先生にプログラムを提案しているのに、それでも、実施できない例もあった。性教育は一時よりも子どもたちに届いていないのでないか。
→保健だけでなく教育関係への連携が必要だろう。昔から解決できていない課題だ。
- ・HIV 陽性者が生きやすい社会を作ることと正しい予防教育の2つを大きな柱に活動を行った。予防教育ではセクシャリティの多様性も伝えている。思春期前の子どもたちに学校で教えてほしいテーマだ。性教育の中にセクシャリティを含めれば、予防にも暮らしやすさにもつながると思う。
→予防啓発の方向性が大切。「ウイルスはコントロールできる」という安心のメッセージが支援現場である種の葛藤を生んだ。「暮らしやすさ」や「多様性」という大切なキーワードが予防啓発にどうつながっていくか。
→個別施策層に予防を重点的に行うだけでは足りない。セクシャリティの多様性が語られれば、一人一人がポジティブに生きることができる。そうなれば予防のメッセージも届きやすく、実践しやすくなるのではないか。
→例えばMSMの問題は大切なので、今年はそこにフォーカスして取り組むというのも一つの方法。また、ユースにフォーカスするのも一案である。
- ・検査に行きたいが行けない青少年が周囲に結構いる。お金の問題、親に内緒にしたいなど。
→HIV 検査は保健所で無料・匿名で受けられるが、他のSTDは行政によって対応が異なる。

《NGO との連携》

- ・正しい知識の普及啓発を行政と NGO で連携して行っている。行政だけではできない。連携の大切さを実感している。
→行政、NGO、医療従事者等で連携に描くイメージがずれていることがある。
→即日検査は積極的に導入している。受検率は全国の中でも高い。MSM に向けた検査会も実施している。しかし依然としてエイズを発症して感染が分かる人が多い。本当に検査を必要としている人に届いているのが心配になる。
→これまでの議論で、多様性、予防啓発の方向性、NGO のアクション、行政と NGO の壁、メッセージのあり方、明確性、メッセージ発信側の意図とその伝わり方、予防のあり方など、実に様々な課題が出てきている。
- ・MSM の予防でいえば、最近の若者はネットで出会うが、そこにメッセージが届きにくい。中高年にはまた別の課題がある。陽性者のなかでも楽観し過ぎる人もいれば、様々な問題を抱える人もいる。病院で見せる顔と社会で見せる顔も異なる。ニーズは多様であり、その中で、声を出す、ちょっと隣の人と手をつなぐ、行政と NGO が手をつなぐ、医療と介護がつながる、そうしたことが大切なテーマなのではないか。
→多様性ということばは、わかりやすく重要なテーマだが、伝わりにくい。リアリティが伝わらず上滑りした経験がある。
- ・感染症を含めた慢性疾患を持ちつつ、人としてQOLを高め、共に暮らしていくというスタンスが必要だ。HIV 陽性のパートナーを持つ人が受検にくる機会が増えている。感染予防の知識と技術を持ち、暮らしやすさや長寿をパートナーとともに得られるよう、行政と NGO が支援することが大切

である。学生に話をするに関心を持ち根底から見つめるグループがある。教育のなかに性の多様性や予防をもっと盛り込めば、若者が変わっていくのではないか。

《テーマのあり方》

- ・エイズはもう怖い病気ではないというメッセージを強く発信した理由の1つに、エイズパニックの記憶が染み込んでいる中年以上の人たちの意識を変えることがあった。対象としてその層はもう十分という見解なら、別の戦略があるだろう。
→ウイルスをコントロールできるという安心から楽観が生まれる。だが、陽性者のアンケート調査では逆に死を意識したという回答も多い。検査の促進は有効な手立てにも思えるし、コントロール可能というメッセージは、多くの人が自分の問題として考えるきっかけにもなるが、一方で、それらが上手く伝わっていない可能性もあることに留意しておかなければならない。
- ・共通の目標をもって活動していこうという意味合いで共有できるテーマにするのか、それとも広く国民に訴えることが目的なのか。それによってかなり違う。
→両方あっていい。包括的になり過ぎ効果がなかったという意見もあり、もっと絞るべきだというものも1つの考え方。個別施策層などに絞るのではなく全般的に通じるものをもという考え方もある。年によって変わってもいいだろう。現場で何が必要か。戦略的であることが重要だと思う。
→抽象的なテーマのもとでそれぞれが展開する方法もある。テーマをどう表現していくか（展開）はそれぞれだと思う。

■閉会あいさつ （公益財団法人エイズ予防財団理事・JASA 事務局長 宮田一雄）

API-Net のテーマに関する意見募集は、期間を延長してお受けしたい。現状の認識と方向性を踏まえて6月に2回のテーマ検討会議を開催し候補案を策定する予定。本日の議論にもあったが、だれを対象に考えるのかについていえば、個人的には、いまはHIV/エイズの流行に関心を持っている人たちが力づけられるような方向性を大切にしたいと思っている。